

『きず』

牧師 柏 明史

最近、結婚披露宴でよく紹介される「祝婚歌」の作者である吉野弘さんという詩人が、興味深い詩を歌っています。詩の題は「創」。たった一字の漢字ですが、これが詩のタイトルです。こういう書き出しです。

「創造・創作・創業などの『創』は『つくる』『はじめる』という意味だが 元来の意味は『刃物によって受けた創(きず)』のこと。では、『創(きず)』と『創造』はどう関わるのか。樹木の人為的繁殖法の一つ『挿し木』がその疑問に答えてくれる。枝の一部分を切り取って地中に挿しこむと 下端の切り口から根が生えて新しい株に育つ。『創(きず)』が『創(はじ)まり』である。」

吉野さんは、『創(きず)』が『創(はじ)まり』である、と言っています。

真の創造がなされる時には、その営みに先立って何らかの「きず」が必要なのではないだろうか。吉野さんはこの詩を通して、そのように語り掛けているのだと思います。吉野さんは、「きず」を決して悲観的ではなく、むしろ物事の新しい始まりに必要なものと捉えています。

「創造」という言葉を聞く時、私たちキリスト者がすぐに思い浮かべるのは「天地創造」の出来事です。

しかし、私たちは、もう一つの「創造」を知っています。

「キリストと結ばれる人はだれでも、新しく創造された者なのです。古いものは過ぎ去り、新しいものが生じた」(第二コリント 5:17)、と聖書が語っている新しい創造です。御子イエス・キリストが十字架にかかってくださり、ご自身の肉を裂き、血を流してくださった。そのキリストの「きず」によって、私たちは癒され、新しい者へと造りかえられた。これが、私たちが経験する新しい創造です。

このキリストの「きず」から溢れ流れる愛は、私たち自身が人生において負う多くの「きず」を通して、私たちの内に注がれます。私たちは、自分自身が負う「きず」を通して、自分の弱さ、足りなさを知ります。

そして、そのような時にこそ、私たちは真の慰めの言葉に耳を傾けることが出来ます。

私たちが負う「きず」は、神様の愛が私たちの内に入ってくる入り口となるのです。

そのことを、星野富弘さんは詩の中でこのように言い表しています。

「わたしは傷を持っている／でもその傷のところから／あなたのやさしさがしみてくる」。

星野さんは、頸髄損傷によって首から下が完全に麻痺してしまおうという大きな「きず」を負われました。

しかし、その「きず」を負われたことによって、信仰に導かれ、素晴らしい詩と絵を作られるようになりました。

そして、それらの作品によって、多くの人の「きず」を癒す働きへと召されていったのです。

星野さんは、ご自身の「きず」から、主イエスの優しさが沁みてくる、と詠っています。その優しさが、絵に表れ、そして詩に滲み出てくるので、多くの人の「きず」を癒すことができるのだと思います。

今回は詩人の話が続きますが、もう一人、島崎光正というクリスチャンの詩人を紹介させていただきます。

生まれた時から脊椎に重い障害を持っていた島崎さんに、信仰を持つきっかけを与えたのは、ある信仰者の手記であったそうです。それは、小さなパンフレットのようなものにかかれた、短い手記でした。

信仰に生きて、信仰に死んだ、結核患者の婦人の手記でした。

この婦人が、危篤になって、父親が病床に駆けつけたそうです。そして、娘の両手を握り締めて、別れをしようと思ったら、その婦人が、右の手の方に差し出された父親の手を振り払って、「いいえ、これはイエス様。こっちで…」と、左の手だけを父親に委ねたそうです。右の手は、堅くこぶしを握りしめたまま、しばらく天の方に向けてかざしていた。しばらくそうして、やがて息を引き取ったというのです。

島崎さんは、自らもその重い病床にあってこの手記を読んで、信仰の最も重要なところを理解したのです。

神の愛は、痛みの中で人の靈魂を神へと追いやる、と島崎さんは述べています。

「きず」や「痛み」を通して、主の愛を知る。何故でしょうか。主の愛が、ご自身の「きず」や「痛み」を通して与えられているからです。主イエスが受肉されたのは、「きず」をその身に負われるためでした。

私たちが新しく創造してくださった主イエスの「創(きず)」は、私たちにとって、新しい命の「創(はじ)まり」でもあるのです。

「彼の受けた傷によって、わたしたちはいやされた。」(イザヤ書 53:5)